

I 令和3年度仁科台中学校の経営ビジョン

1 教育理念：聴く学校

学校は、生徒たちが学び合い育ち合うことを学習指導と生徒指導を専門職とする教師が保証する空間です。そこでは、互いが、かけがえのない大事な存在であることを認め合うことが重要です。そのために、「聴く」ことが基本であると考えます。

「聴く」とは、「耳を傾け、相手の心に寄り添いながら聴く」「相手の気持ちやその背景をも理解しようと心から共感する姿勢で相手の言葉を聴く」ことです。この「傾聴」は、音や言語を情報として耳に入れる「聞く」よりも、相手とつながろうとする意志をもつものです。

教師は、これまでともすれば、生徒を条件付けで、あるいは部分的に評価することに陥りやすく、そのことが生徒と教師の距離を遠ざける要因になっていたように思います。生徒が安心して教師とともに学び続けるためには、教師が「目の前の生徒を丸ごと受け止め、生徒のよさをその生徒の全体としてとらえ、生徒に伝えていく」ことが必要です。このような教師の「傾聴」と「愛語」による姿は生徒間の関係づくりのモデルとなり、生徒は生産的な人間関係の中で「自己有用感」を育み、学ぶ意欲を高めていくことでしょう。

生徒と教師がともに学ぶ学校という場を、「傾聴」と「愛語」を基本とした互いが居心地のいい空間にしたいのです。

2 目指す学校像：学校づくりの根幹を「授業づくり」に置く学校

今はまさに、答えのない先の見えない時代といわれています。この時代に必要な力は、自ら学び自ら考える力、すなわち自分に必要な学習を自覚し自分から進んで取り組む「自己調整学習力」です。「自己有用感」を育み、学ぶ意欲をもった生徒は、「自己調整学習力」を身につけることで『自律した学習者』となります。

「自己調整学習力」は自己との対話（振り返り）によって養われます。「自己調整学習力」を高めるには、学びの節目で振り返る場を設定し、生徒が自己との対話により、自らの学びの成果と課題を明らかにしたり、次の学習を見通したりする経験が重要になります。学期というスパンでいえば「学期はじめと学期末」であり、一時間の授業であれば「導入・展開・まとめ」となります。生徒が1日の大半を学校で過ごし、そのほとんどは授業であることから、『自律した学習者』を育てる主たる場は授業となります。その意味で学校づくりの根幹は授業づくりであるといえます。

そこで、全教科・全領域で大町市の進める対話を基盤とする「協働の学び」を取り入れます。この授業では自己との対話、つまり、振り返りが連続して行われることが期待できます。自分の考えと違う考えを持つ友との対話を通して、自分の解決策を見つめ直したり、更によりよい考えや方法を創り出したりしていく深い学びが発現します。そして、その深い学びによって筋道立てて考え適切に伝える力、「論理的思考力」が養われます。生徒が自己調整しながら問いを追究する「協働の学び」を軸とした授業では、対話の質が課題となります。

この時代において教師もまた、生徒とともに『自律した学習者』になることが求められます。生徒と教師がともに『自律した学習者』になるために、振り返りを中心とした評価システムを構築します。生徒の振り返りでは、スケジュール帳、単元テスト、キャリア・パスポートを活用します。教師の振り返りでは、ミッション探索カードを活用し、「傾聴」と「愛語」により生徒の学習意欲を高める教師を目指します。

これらの取組から、「聴く学校」を合言葉とする学校づくりと、自己調整しながら問いを追究する「協働の学び」を軸とした授業を通して、『自律した学習者』を育成します。

仁科台中学校長 興 幸雄